

筆者と写楽との出会いは、いつだかに放送されたNHKスペシャルである。本稿を書くに当たって改めて調べてみたら、2011年の放映であった。

無論、それ以前にも中高の日本史などで「東洲斎写楽」という名前に触れたことはある。ただ、あくまで大量の文化人の名前が大量に処理される学校教育での出会いであって、筆者の中での写楽は「江戸時代にたくさんいた絵師の一人」という程度の認識でしかなかった。この認識を変えたのが、前述のNHKスペシャルである。

番組のメインテーマとなっていたのは、ギリシャの美術館で発見された写楽作と思われる肉筆画の分析と、写楽の正体についての考察であった。この番組で初めて、筆者は写楽が正体不明の絵師であり、その素性については諸説入り乱れて百家争鳴の様相を呈しているということを明確に認識した。

さて、前述の通り写楽の素性については未だ定説を見ない。もともと浮世絵師という人種には素性のはっきりしない人間が五万といるのだが、写楽についても同様の状況があり、同時代人による彼に関しての記述も極めて僅少なものが残っていないのである。

写楽の素性について長らく唯一の情報を提供していたのが、江戸時代末期の考証家・斎藤月岑げっしんが著した『増補浮世絵類考』ぞうほうきよえらいこうである。同書には、写楽の正体

が阿波徳島藩お抱えの能役者・斎藤十郎兵衛じゅうろべゑである、とのこれまた極めて素っ気ない一文があった。その後しばらくは、この情報が特に検証されることもなく信じられていたといってよい。

しかしその後時代が下ると月岑のこの記述に疑義が呈されるようになり、いわゆる「写楽別人説」が雨後の筍のように乱立していくことになる。写楽の正体として実に様々な有名絵師の名前が挙がり、議論は收拾がつかなくなるかとも思えたが、実のところ「別人説」の問題意識の出発点はだいたいどの見解においても共通している。

写楽作の浮世絵を出版していたのは、ご存知蔦屋重三郎つたやじゅうざぶろうである。仮に写楽の正体が斎藤十郎兵衛だとしたら、当時の大出版社である蔦屋が、なぜ無名の能役者の売れそうもない絵をあそこまで大々的に売り出したのか。これが、別人説がこぞって強調する疑問点である。

写楽の絵が蔦屋から出版されていたのは、1794（寛成六）年5月から翌1795（寛成七）年3月にかけての僅か十ヶ月余りである。この間に写楽は実に150近い作品を世に送り出しているが、時代が下るにつれて、その筆致はどんどんしょぼくなっていく。これは、絵については素人の筆者が見ても明らかにしょぼくれているのが分かるレベルである。

写楽の作品で最も高名で、かつ現在最も高価なのは写楽が絵を描いていた十ヶ月間のうち、最も初期の時分（写楽研究者の言う「第一期」）に描かれた歌舞伎役者の大首おおくび絵である。この第一期の絵は、当時実際に公演されていた歌舞伎の場面場面を切り取って、自らの役所に扮する役者たちをどアップで描いているものであるが、いずれも見る者を圧倒し有無を言わせぬ迫力がある。素人目に見ても、その力強さは瞭然としている。

ところが、出版当時の評判は必ずしも芳しいものではなかった。第一期の絵を実際に見ていただければ分かるが、役者の特徴をいいところも悪いところも誇張して描いており、美化しようという意識があまり感じられないのである。当時の役者絵というのは、歌舞伎を見に来たお客のファングッズである。アイドルのプロマイドみたいなものを想像していただければ、間違いはない。当然顧客は、自分の鼻負やお気に入りお気に入りの役者が美しく・恰好よく描かれている絵を買おうとする。そういうものほど、売れ筋がよい。役者も、自分が美しく・恰好よく描かれることを望む。そこにはエンターテインメント特有のある種の嘘があることは間違いないのだが、写楽はこの嘘が嘘であると白日の下に晒す道を選んだのである。不細工な役者を美化して描くことはなかった。女形の役者の絵も、演じているのが男だとはつきりと分かるものだった。そのため写楽の役者絵は客からも役者からも評判が良くな<sup>おおたなんぼ</sup>く、売れ行きも良くな<sup>おおたなんぼ</sup>かったと伝わっている。これは、同時代人の大田南畝も記しているところである。

さて、このように売れ行きが良くなかった写楽の絵に最終的にゴーサインを出したのは、既に述べた通り、ほかでもない蔦屋重三郎である。蔦屋といえば当時のヒットメーカーであり、前述の大田南畝の狂歌本のほか、さんとうきょうでん山東京伝のきびょうし黄表紙、喜多川歌麿の美人画など、江戸中の人口に膾炙したヒット作をいくつも飛ばしてきた人物である。写楽が描いてきた「嘘を暴いている」役者絵を見て、「こんなもの、売れるわけがない」というのも即座に分かったはずである。その蔦屋が、なぜ負ける勝負にわざわざ出たのか。

長くなつたが、写楽別人説は基本的にこの疑問を説明しようという試みである。例えば「写楽の正体は（喜多川歌麿や葛飾北斎みたいな）既に売っていた有名絵師だ」と唱える説は、「有名絵師が余暇でやっていたことだから蔦屋も無碍に出版を断れなかったし、そもそも売り上げも度外視できたのだ」と説明する。ところが「写楽＝斎藤十郎兵衛」説に立つと、蔦屋が業界では無名の絵師に大規模な投資をして売り出したことになってしまい、その動機や理由をうまく説明できなくなってしまうのである。裏を返せば、この点が斎藤十郎兵衛説の今のところの最大の弱点なのである。

本作では、この疑問に一定の説明をつけたつもりである。というよりかは、筆者が本作を書いたのは、この疑問に答えることに何らかの文学的な価値があると考えたからにほかならない。

それはどういう意味か。以下ではこの点を説明する。

実のところ、これまで色々斎藤十郎兵衛説の弱点を挙げてはきたが、現在学界で最も有力なのはこの説である。その理由を説明しても文献学・史料学的な細密でありおもしろくない話になってしまうので詳しい部分は割愛するが、主には能役者・斎藤十郎兵衛の存在を示す史料が「能」関係の方面から複数出てきたこと、写楽＝斎藤十郎兵衛であることを示す他の史料が出てきたことなどがこの説を強力にバックアップしている状態である。特に斎藤十郎兵衛については、研究の結果様々なことが分かってきている。例えば当時の能役者が一年ごとに当番と非番が交代で職務に当たっていたことなんかも分かっているため、写楽は非番の一年間を十ヶ月間の創作活動に充てたのではないかと

も推察されている。

筆者自身も、本作を書くにあたって様々な文献に触れたが、それらを全て勘案しても今は斎藤十郎兵衛説が一番正解に近いと考えている。なぜなら、前述の文献学・史料学的な話を除いて考えても、写楽が無名の能役者・斎藤十郎兵衛であると考えたときに立ち現れる人物像が、彼の絵師遍歴と最も合致するからである。

能役者というのは、身分的には武士である。当時、能は武家の典礼・儀式の場面において様々に用いられていたため、各藩にお抱えの能役者というのがいた。斎藤十郎兵衛は、前述の通り徳島藩に雇われていた能役者である。

そして写楽が絵を描いていた当時は、先の老中・松平定信による寛政の改革の余韻が色濃く残っていた時代だった。贅沢や派手な娯楽は悪とされる一方でお上からは儉約をも奨励され、歌舞伎からも客足は遠のいていた。そんな中で支配層の側である「武士」の写楽が、娯楽・贅沢の範疇に入る歌舞伎の役者絵を描くことは、当然大っぴらにはできないことだったと推察される。

それでも、写楽には華やかなエンターテインメント業界に対する憧れがあった。その憧れを裏付ける確固とした画力もあった。自分も、喜多川歌麿のような今を時めく絵師としての、手放しの賞賛を受けたかった。能役者は、彼にとって売れない期間を食いつなぐための仮の姿に過ぎなかった。そもそも武家の典礼・儀式と化してエンターテインメント性を失った能などというものに、どれほどの存在意義があるのかが分からなかった。彼が志していたのは、黴臭い伝統芸能のようなものではなく、あくまで大衆の熱狂を肌で感じ取れる歌舞伎であり、黄表紙であり、浮世絵であって、エンターテインメントだった。

幸い今度また自分は非番になる。一年もの間、時間ができる。この一年を利用して、絵を描いて描いて描きまくろう。ここで財と名を為してしまえば、あとはどうにでもなる。大田南畝だって、狂歌本が売れたから大きな顔をしているが、もとは武士なのである。無論絵を描いていることがバレたら能役者を続けることはできなくなるだろう。家族にも累が及ぶかもしれない。でも、自分に嘘をつき続けている現状よりはマシだ。

写楽は鳶屋の門を叩き、新進気鋭の絵師として大々的に売り出された。でも

なり立てのキュウリのように青臭い彼には、「売れる絵」と「描きたい絵」の違いが分かっていた。彼にあったのはエンターテインメント業界にある漠然とした憧れと、そこに従事する人が顧客から受ける賞賛への嫉妬混じりの羨望だけで、彼らがその賞賛を受けるためにいかに努力しているか、いかに客のために腐心しているかを分かっていた。彼は、どういうものを描けば売れる絵になるかということを顧みずに、自分の描きたいものだけを描き続けた。嘘で塗り固められたエンターテインメントの裏側にある本質を鏡のように映し続けた。それはまさに、エンターテインメントというものの本質に真っ向から喧嘩を売る営為にはかならなかった。エンターテインメントに喧嘩を売った彼が、エンターテインメントからそっぽを向かれるのは、自明のことであった。

それでも彼は、絵を描き続けた。彼も完全な馬鹿ではないから、描き続けるうちに気が付いた。歌麿や歌舞伎役者が売れているのは、賞賛を受けているのは、客の望むことをやり続けているからである。エンターテインメントで名を成すには、自分のやりたいことよりも、客の望むことを優先しなければならぬ。客の望むことをやるからこそ、客からお金をもらえるのであって、その点は今まで自分が取るに足らないものとして見下していた能役者と寸分違わぬところはない。

そして、どうやら自分のやりたいことは客の支持を受けられることではないようである。

そうであれば、エンターテインメント業界にも自分の居場所はない。それはすなわち、この世の中に自分の生きていける場所がないということである。

もしかしたら、自分は最初からこのことに気が付いていたのかもしれない。でも、自分の居場所がこの世に一切ないなどというとても絶望的な真実を受け入れられなくて、「エンターテインメント業界なら自分の生きていける場所がある」と嘘をついて自分を騙していたのかもしれない。そうだとしたら、これほど滑稽なことはない。歌舞伎や浮世絵のファンには「お前らの熱狂しているものは嘘だ」と暴露して悦に入っていたのに、真実自分も自分が見下していた連中と同じ地平に立っていたのだ。自分が信じている嘘が暴露されるのだけは

忌避しようとするなんて、何と傲慢な態度であろうか。そんなことだから、罰が当たったのだ。

写楽の絵は、第二期・第三期・第四期と時代が下るにつれてどんどんと精彩を欠いていった。第一期の絵が周囲から総スカンを食らったことで、彼の中でも何とか「売れる絵」を模索していたのかもしれない。それでも、自分が描きたいものは決して世の中に受け入れられることはないという甚だ残酷な現実に絶望した結果、モチベーションもそこまで上がってこなかっただろう。結局第一期以上のインパクトは与えられぬまま、写楽は失意のうちに筆を折り、斎藤十郎兵衛に戻った。

当然、あそこまで大々的に売り出されていたのだから、写楽の正体に感付いていた人もいるだろう。藩や幕府からも、きつく叱られたかもしれない。それでも、妻子もいる写楽は、膝を折り頭を下げてでも彼が歯牙にもかけていなかった「俗吏」に戻らねばならなかった。

筆者が本作を書いたのは、仮初めの食い扶持である弁護士になってはや二年が過ぎ、他方で筆者が志向しているエンターテイナーや表現者としての道もままならぬまま悶々としている現状に、斎藤十郎兵衛である写楽との酷似を見出したからである。5年前に見たNHKスペシャルの写楽をなぜ今になって思い出したのかはもうはつきりとした記憶もないが、とにかく本作の執筆前に再会した写楽は、「自分ではないか」と思えるぐらいシンパシーを感じられる境遇を過ごしていた。境遇だけではない。自分のやりたいことをやっているだけで客に寄せようという努力を全くしていないのに、自分を理解しようとしないうと世の中とにブーたれるだけで自らを省みない（『山月記』の李徴のような）幼稚な精神構造も、筆者自身と瓜二つだったのである。裏を返せば、だからこそ、筆者の中では斎藤十郎兵衛説が最も有力になったのである。自分と瓜二つの写楽は、あくまで斎藤十郎兵衛である写楽だけである。ならば少なくとも筆者の中ではそのように考えて、自分の仲間を増やしておいた方が安堵できる。あとは、この写楽がどのように蔦屋と出会い、なぜ蔦屋が写楽で勝負しようとする

いう気になったかを丁寧に描いて説の弱点を補強してやれば、筆者が納得できる写楽像は完全に結実する。

写楽は、筆者の現身なのである。

筆者も何年ももがいているが、「おそろく自分のやりたいことは客にウケることではない」という推察は確信に変わりつつある。筆者が志すエンターテインメントの道も、自分のやりたいことだけをやって生きていられるわけではない。本作を漫画にせず、小説という形をとったのも筆者の画力で写楽の筆致を表現しきる自信が全くなかったからだが、これも妥協かもしれない。でもこの疑念の萌芽が確信に変わってしまったら、筆者にとっては死ねと言われるに等しい。幸い写楽や李徴のように養わなければならない家族がいるわけでもないので、しばらくはこの状況を続けられるが、この世の中は筆者にとってはあまりに絶望的なのである。

写楽には確かな筆力があつた。少なくとも、彼は死後大いに評価された。

みんな、どうしているのだろうか。